

第6回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和3年7月13日（火）15:00～

■会場：北海道教育大学札幌駅前サテライト「教室1」

■出席者 委員：

伊藤 千織いとう ちおり／伊藤千織デザイン事務所 代表
漆 崇博うるし たかひろ／一般社団法人A I Sプランニング 代表理事
大友 恵理おおとも えり／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員
尾崎 要おざき かなめ／アクトコール株式会社 代表取締役
カジタ シノブかじた し の ぶ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター
木野 哲也きの てつや／ウタウカンパニー株式会社 代表
小島 達子こじま たつこ／株式会社 tatt 代表取締役
酒井 秀治さかい しゅうじ／株式会社 SS 計画 代表取締役
八條 美奈子はちじょう みなこ／札幌フルーツ協会 副会長
関 鎮京みん じんきょう／北海道教育大学岩見沢校 准教授
森嶋 拓もりしま ひろし／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長
山本 雄基やまもと ゆうき／画家

欠席：古家 昌伸こいえ まさのぶ／北海道新聞社編集局文化部長
佐久間 泉真さくま もとまさ／市民委員

事務局：

札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之

札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 高橋 由美子

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 下山 竜平

■議事概要：

1 第5回会議の検討内容と短期的視点で取り組むべき事業について

(1) 事務局説明

○第5回会議で検討された内容について資料1に基づき説明した。

○第5回会議の検討内容を短期的な視点と中長期視点で取り組むべきものとして文化部で整理した内容について説明した。

(2) 各委員からの意見

○今回はアウトリーチでいいのかもしれないが、ほかにも幾つかの弾が必要ではな

いか。

- 短期的なものの中長期的なものを区別する前提が分からない。なぜアウトリーチが短期的なものに区分され、それが効果的なのか。今、本当に緊急で、短期的に必要なものが除外されてしまっているような感じがする。それを中長期に回すということなら、その説明も必要。
- 第5回会議で3時間くらいしゃべったのに、アウトリーチにすっと落ちてしまっていることが、何でとなっている。なぜそうなったのか、そこが一番大事だと思う。戦略ビジョンなど、話し合っているテーマから、文化部はどういう立ち位置で、どういう考えを持っていて、我々とどういった関わりを持ち、どんなものを議会に持っていきたいのかなど。
- 突然過ぎるという印象があるし、どう考えてももっと先に考えることがある。そのコミュニケーションをちゃんとしてから進めるべきなのではないか。
- 今日の会議ではアウトリーチも含めた短期的な予算要求に値するものの頭出しをしていくことになるのではないかと思う。
- 平均的なものの上に行くという傾向がある。アウトリーチについてはみんなが思っていることだが、優先順位は低め。アウトリーチのような、割と温和なところから行くと、私たちの尖っているところに行きたいということが伝わらない。そのため、どういうメッセージを出したいか、構成をもう少しもみたい。これはアウトリーチが駄目ということではない。
- アウトリーチを弾の一つにし、あと、もう1個か2個、話し合っただけで決めるのはどうか。また、円卓会議をやって、クリエイターの意見を役所がまとめますということでは何にもならない。自分たちのアイデアや発言が本当に吸い上げられるのかはすごく気になる。
- 短期的なもので至急必要なものは何なのかをみんなで議論することが大事。
- コロナ禍における短期的視点で、アウトプットや練習の機会、場所の減少、市民が文化芸術を見に行きにくく、文化芸術を享受できていないという課題があって、その上で対策できそうなものがアウトリーチとなったのだと思うが、アウトリーチは対象がすごく限定的だし、割と中長期的視点のプログラムなのではないかなと思う。
- 大きい船を今からつくって、アウトリーチだけ押すのではなく、アウトリーチも乗っている船をみんなで作るというのでは駄目か。
- 事業の一つの中に人材育成も入っていたり、各団体に対する支援目的のものも入っていたりして、結果的にアウトリーチが実現するというフレームを上手につくれるのであれば、それはありかもしれない。

○第5回会議でグループごとに話していたことの中で、どれを優先的にやるべきかについては、時間を区切り、もう一回話をしたほうが良いと思う。

2 文化部で取りまとめた事業アイデアについて

(1) 事務局説明

文化部で取りまとめた事業アイデアについて、資料2、資料3、資料4に基づき説明した。

(2) 各委員からの意見

- アウトリーチは、人が豊かに暮らすためにすごく大切なことだとずっと思っていたし、コロナがきっかけかもしれないが、札幌市がアウトリーチに目を向けたということはすごくうれしい。
- 資料3のアウトリーチ普及・活性化事業は、基本的に団体向けの事業になっているが、自分の周りのアーティストは個人で活動している人間が多い。個々が困っている状況で、この団体向けの事業でどれだけの人が救われるのかは疑問に思う。
- これはこれで進めていいのではないか。さらに、これに現場の声が入ればもっといいものになると思う。
- アウトリーチは全員には向いてはいない。コロナ禍における支援ということに特化すると、なるべく多くを拾いたい。落とさないことを前提の助成金のようなものが緊急的な支援としてはよいと思う。
- アウトリーチもやり方次第だと思う。公演やワークショップ的なコミュニケーションを積極的に図っていくタイプのやり方に向いている人と向いていない人がいる。この議論で重要なのは、アーティストの創作支援であり、アーティストが創作をやめないための支援だと思う。アウトリーチのイメージはそれぞれ違うが、バリエーションはいろいろあるので、そのつくり方によって支援できる幅は変わってくる。
- 美術系のアーティストをアウトリーチで送り出していくためには、アイデアやプログラムの工夫がいる。通常の補助金の公募だと、アイデアをつくる人がいるが、中間支援の担い手が薄いので、それをやれる人がどのくらいいるのか心配。
- アウトリーチもやり方次第で、必ずしもプランが必要だとか、プランニングができるアーティストでなければいけないということはない。もちろん、中間支援がかなり重要になってくるということはある。
- 札幌市が言うアウトリーチというプロジェクトがどういうものを再定義し、札幌型のアウトリーチというビジネスモデルをつくるのであれば、それはそれでいいのではないか。アウトリーチという言葉がいいのかは分からないが、このスキ

ームが悪いとはそんなに思わない。もう一つ、アウトリーチは間接支援なので、もっとがっつんと直接支援してくれるもの、本業をもっと盛り立ててくれるような弾も出したい。

- 団体やアーティストは芸術を届ける側で、その先の芸術を受ける人に対するアーティスト側のアウトリーチだが、アーティストが受け手になってもいいのではないか。アーティストも苦勞して仕事をしながら作品をつくっている一市民。そういうアーティストにアウトリーチをするというもの。まず、アーティストも市民なのだから、僕らを守ってくださいという考え方も入れてほしい。
- 2本立てで、コロナ禍における支援は、困っている人たちに、表現、創作する人に直接的に支援をして、その一方、アウトリーチをやることで福祉施設などの受け手の人たちも喜ぶものをするのはどうか。
- アーティストのためのアウトリーチであれば、アーティストが仕事をして、自分たちの活動が継続できたということの評価すればいい。アウトリーチの受け手が良かった、悪かったと言っていることを評価する必要はないと思う。
- 2本立てはいい。アウトリーチを完全に否定をしてはいないが、根本からずれているなと思う。プレーヤーに労働をさせ、それを鑑賞者に判断されるというのは、プレーヤーに優しくなっていないのではないか。
- アウトリーチという言葉を使うから引っ張られてしまう。楽器体験やワークショップでもよくて、出前型の演奏会でなくてもよく、申込みを行うアーティストや中間団体は自ら実施先を探し、申込み前に実施先と実施内容や場所などの調整を行うということなので、自由度は大きい。その一方で、アウトリーチが苦手な方や作品自体に毒が強い方もおり、全員にははまらないとは思ふ。また、難しそうだと思うのは、申込みを行う前にアーティストが実施先を探すというときに、学校、学童、福祉施設と話をつけること。本来のアウトリーチっぽい学校、学童、福祉施設へのアプローチが難しそうだと感じた。
- アウトリーチという言葉に引っ張られるというのは自分も同じ。例えば、アウトリーチという言葉アーティスト及び表現者、表現団体の活動拡大支援事業みたいにするとう印象も違ってくるのかと思う。
- アウトリーチは、どちらかというと、長期的な支援。アウトリーチが駄目なのではなく、困っている人の直接的な支援になっていないということが最大の問題。アウトリーチのやり方を工夫するのか、その中身を詰めていくのはどこかで時間を取ってやるとしても、アウトリーチは一旦置いて、短期的なものの話で言えば、直接的なところや深刻なところにやったほうがいいのではないか

3 必要とされる短期的な支援策について

これまでの議論も踏まえ、短期的な支援策で必要と思われるものについて議論を行った。

(1) 各委員からの意見

- アンケートの結果を踏まえた流れでこの会議があるとしたら、緊急に必要なダイレクトな支援を打ち出せないとあまり意味がない。
- 一番大事なのは、緊急的なアーティストへの創作活動支援や芸術団体に対する直接支援。そして、その成果を見て、支援として有効だったかどうかをフィードバックされるような施策。もう一つは間接的なもの。それがアウトリーチなのかは分からないが、受け手側にとって効果的だったと思われるような施策。方向性として、その二つが含まれているような事業スキームがつけれるといいと思う。
- 支援対象について、やはり、表現活動をしている、かつ、コロナ禍で具体的に収入や展示機会が減った人。アーティストの企画に対して半分の補助をするといった助成金や稽古に使う場所をレンタルしている人たちの補助などがあればいいのではないかと思う。
- 中間支援団体の活動の一つにアウトリーチがあると思う。だから、アウトリーチの普及・活性化支援というより、中間支援団体活性化支援で、その中にアウトリーチもある、マネジメント人材の育成もあるなどとし、それに応募してもらい、選定委員会が審査して、決定するという方法もあるかなと思う。また、アーティストへの創作活動支援に関してはサバティカルの要素もあると思う。
- プロセスに関していうと、アーティスト・イン・レジデンスの仕組みや考え方が参考になると思う。札幌の天神山アートスタジオは、基本的には明確なアウトプットを前提とせず、成果報告をやってもらうということだけが決まっており、創作の過程に対して支援をしていく奨学金的な制度になっている。そうした奨学金的な考え方ができれば、ダイレクトな成果や明確なアウトプットではなく、活動そのものを応援するという感覚になり得る気がする。
- アーティストに直接支援を、要するに補助金を出すことが一番分かりやすいし、補助にもなる。どうやって対象を絞っていくかという条件を積んでいけばいいと思う。アーティストや活動をしている人たちとしてふさわしい定義、条件をみんなで作っていけばいいのではないか。
- 福祉の対象に近い考え方になってほしいと思っている。子育てをしている人は、札幌市からサポートをもらっているが、別に誰かに見せて感動させるためにやっているわけではない。子育て自体がまちにとって価値のあることだからサポートされるわけで、美術もそれと同じでいいと思う。

- 演劇は、今、逼迫している。アウトリーチの話がとても遠いことのように思える。演劇をやる人がどんどん減っていきそうなおそれがある、今が一番ひどい状況。新しい助成金も考えどころだが、誰でもよいというものにしたとき、そういうことが得意な人が取っていくという傾向がある。本当に困っているけれども、助成金の取り方が分からないという人はやめていってしまうのではないかなと思っている。
- 一つのフレームをつくっていく条件として手続を簡単にするということがあるが、ある程度のキャリアがあって、今後もこういう活動を展開していきたいという意思をきちんと持っているかどうかは確認する必要があると思う。
- フィルターでいえばキャリアで、何年以上活動している表現者とするかといったもの。あるいは、具体的に幾らの損害が出ているかで、書類の証明などを用意してもらおう。
- 活動実績の提出を条件にするのはどうか。中止になったものも証拠は出せると思う。どういった審査基準で審査員を用意するか、そこできちんと精査をかけられるのではないかと思う。新しく助成金を立ち上げることについて、札幌市が掲げたいろいろな文化芸術のノウハウを積み重ねていけることが必ずある。助成金の申請手続の簡略化については、SCARTSの窓口の人たちの活躍の機会かもしれない。ここで書き方を教えるなど、そういうことは後で肉づけできると思う。ただ、今決めなければいけないことは事業の助成金の目的と対象者。対象となる事業や、活動とは何かを具体的に詰めたほうがいいと思う。
- 取手市では、アーティストファイルみたいなものをつくり、インタビューに答えた人にお金を配るといったものがあった。では、どうやってアーティストを選ぶかだが、海外だとアーティスト・ステートメントがすごく重視されるという話を聞く。つまり、私はこういうアーティストで、こういうことをやりたい、というものを何ページも書かないといけないのだが、これが弱いアーティストは一流になれない。こうしたことは日本ではあまりない。作家自身のレベルの向上を考えたとき、向き合うことで向上するし、いいのではないか。なおかつ、市民に対してこういうアーティストがいるのだという紹介にもなる。
- アーティスト・ステートメントを軸にできたらすごいと思うが、コロナの緊急支援ということにおいては、申請書に思いを800字くらい書かなければ駄目とかにしてはどうかと思う。アーティスト・ステートメントはすごくいいと思うし、それをアーカイブ化することもできるかもしれない。
- 第5回会議のときのアーティストバンクのアイデアは、登録をしたらお金を出してみたいなものだが、登録の際にはフィルターが必要。今のステートメントにする

のもあるかと思う。また、インタビューを載せるのもよいと思う。行為が付属することでお金が出せるということができればもっといいのかもしれないが、他の委員の金額感が知りたい。自分がアーティストバンクのアイデアを出したときは1万円くらいをもらえたらいいくらいの感覚だった。直接支援がどれくらいの金額なのかによって考えなければいけないフィルターの厳しさも変わってくる。

- アーティストバンク的なものが入口にあって、それは、多分、少額でいいと思う。分野関係なく、創作活動そのものに対して支援するものは、アウトプットは要求せず、ここからこの期間、こういう活動をしたいということに対して50万円や100万円を出すというボリューム感。
- 入口で直接支援的な少額の支援金みたいなものをもらい、それに登録した人がこちらの支援策や助成金に申請ができるというような仕組みはどうか。
- 岡山県がアーティストバンクみたいなものをやっていて、派遣系のスキル込みで申請してくださいというもの。お金はつかないが、やった上で次にアウトリーチみたいなものにつないでいる。次の事業につながり得る基礎情報を集めることができるという意味では得ではないかという気がする。
- 芸術だけで食べている人しかプロのアーティスト、なりわいとして認めないのかということで、自分はそうは思わない。社会に対して継続的に発表していて、毎年、あるいは、2年に1回、市内、国外、市外で発表していることがアーティストの条件だと思う。また、副業ではなく、事業として活動する人の、コロナの影響で前年から減った収入をベースにするべき。それが一番公平だと思う。できるだけそういう条件にして、ここさえ守っていればアーティストだという条件をこちらでつくり、それに当てはまる人を引っ張り上げていく。与える金額も、1万円や5万円など、低くていいと思う。そして、例えば、受賞歴が何個以上、活動歴15年以上、国際芸術祭に出た回数が何回以上など、質の話になれば、与える金額も10万円から50万円にする。緊急で必要なのは、フィルターが薄くて、額が低いもので、できるだけ多い人数に公平に当たるものだと思っている。
- やめてしまうということが一つの大きな問題。そこに対してというスタンスであれば、創作活動を続けてくださいという支援ができればよい。
- コロナ禍の中、札幌は文化芸術のあるまちとして、何より大切なものはアーティストや表現活動をする人たちの存在、失ってはいけない財産で、そのためにアーティストへのダイレクトな創作活動を継続するための支援が必要と考えます。まずは広く、どんなアーティストにも支援できるもの、アーティストの価値を発信することを支援するというので、その一つがアーティストバンクへの登録で、そこにステートメントみたいなものも掲載すると。登録した方には、1万円なの

か5万円なのかは分からないが、支援金をお支払いし、札幌市は責任を持ってアーティストの情報発信をしていきますと。さらに、この事業は別の性格を持っていて、それは奨学金制度なのかもしれないし、あるいは、創作活動のアウトプット不要の支援制度かもしれない。未来会議としては、コロナ禍においてはこれを大事にしたいと言うことが大事なのかなという気がしたが、どうか。

- 緊急的にサポートする、スピード感的にはArts for the future！（注：文化庁のコロナ禍における支援制度）がある。コロナ禍での緊急的な支援というのは今のもの。でも、（説明を）聞くと、予算要求をして、来年のいつに募集するものなのか。そのとき、コロナ禍の緊急支援というタイトルが本当につくのか。来年に向けて、札幌スタイルのアーティスト支援はこうだというものを出せるくらい、第5回会議のまとめを軸につくれるような気がするが、それは本当の緊急支援、目の前のというものとはならないのだなと思っている。
- 中間支援団体活性化支援がいいと思う。状況はみんな違う。幅広い方に1万円から5万円と渡したとき、それで助かる人もいると思うが、公演を打つのに100万円、200万円、300万円とかかるような演劇の人はいまいちだと思う。置かれている状況が違うので、やはり、そこを細かく拾っていける人たちがいるということが大事だと思う。中間支援団体の一番つらいところは、自分たちにお金が残らないところ。中間支援をする人たちはボランティアでやるものではないところがあって、それが中間支援団体が育たない原因かと思っている。
- アーティストへの創造継続活動支援を包括的な一つの政策として掲げて、政策として細かいものを考えるのではなく、中間支援が考えていくという理解でよいか。
- 管理や運営も基本的には中間支援団体がやって、札幌市はそれを評価、検証して、次の年度につなげるみたいなイメージ。中間支援団体ごとに対象も、補助内容も違うというもの。ただ、何らかの社会課題の解決を目指すということ。
- トータルでいいのではないかなと思う。アーティストへの創作活動支援が超短期のもの、もう一つが中間支援のもので、細かいメニューに関しては精査できるし、それぞれが連動しやすい状況もつくれるのではないかと思う。トータルで活動の継続を支援する制度にできればいい。
- 前は（国や自治体の）補助金なり助成金のフレームはもっと緩やかだった。でも、気づいたら、すごく細分化され、応募しづらくなってきているという印象がある。でも、今のアイデアだと受入れ体制が少しよくなるのかなという感想を持った。アーティストへの創作活動支援は、個人対象になっているように思うが、団体の枠組みもつくれば、劇団などの支援にもつながるのかと思う。
- 2本立てにする必要はあると思う。芸術は多ジャンルなものだが、大きく二つに

分けられると思う。一つは、美術家や詩人、作曲家、映像作家など、具体的な制作物をつくるパターンで、そういう人に向けてはアーティストへの創作活動支援が効果的だと思う。役者やダンサー、演奏家など、行為が芸術になっていくパターンは中間支援団体活性化支援のほうが適していると思う。だから、広く芸術家をサポートするのなら2本立てになるという気がした。

- 市内におけるアウトリーチの普及・活性化事業も、解釈を物すごく広くするのなら、行政と中間支援団体みたいな構図になるのかなと思う。ただ、これは（芸術文化活動の）発表を伴うということが絶対的にあると思うが、すごく自由度が大きい。これで発表系の人幅広く拾えるのかなと思う。ただ、そうではない人たちもいるので、そこをどう拾ったらいいのかということかと思う。
- 1本にまとめると、コロナ禍における文化芸術活動継続のための中間支援団体支援事業だと思う。コロナ禍で困っているアーティストを支援する事業を提案する中間支援団体を募集するというもの。例えば、アウトプット不要の創作プロセスに対する助成金を出す中間支援団体、奨学金制度をやる、演劇の団体に対してかなりフリーな助成金を出すなど。その一つとしてアウトリーチ活性化事業をやる可能性もある、そのように1本にしていいのか、もう少し中身を打ち出すのかということなのだと思う。
- なるべく多くのアーティストや団体に応募してもらおうという意味においては賛成。ただ、そういうことを考えられる団体は何個あるのか。ただ、札幌オリジナルの新しい未来、クリエイティブシティという意味では、中間支援団体活性化支援にして、アーティストへの創作活動支援のダイレクトというのは残しつつ、その2本柱でどうか。
- 創作活動プロセス支援部門やアウトリーチ部門と部門を決めてしまうのはどうか。そして、その中間支援団体を募集する。
- 部門かテーマにすると少し応募しやすくなると思う。それから、どちらがいいのかは分からないが、実行委員会形式にして、そこが受けているいろいろなことを振っていくということもある。もし中間支援団体が弱いということであれば、未来会議の実績のあるメンバーで枠組みをつくってつなげてあげるのはどうか。
- 支援団体は、ある程度の事業を経験している実績のあるところでないといけない気がする。そういうところでないといけない。ただ、分野の違う、例えば、教育関係者にしろ、民間企業なりも一団体として募集してもらえばいいと思う。ある程度の経験値がなくてはならないが、そのチャレンジを支えるのがSCARTSの役割で、そういうことかと思う。
- 自分の予算感としては、1億円だとしたら、1,000万円掛ける10団体とい

うイメージ。例えば、アーティストのために700万円は使ってください。また、200万円か300万円は自分の人件費でいい、あとは再分配してくださいというイメージ。そうすると中間支援団体自体の力もつくし、そこでマネジメント人材も育成されるのではないか、分野ごとの細かい課題にも対応していけるのではないかと思う。

- 中間支援団体を募集して、そこから再分配をする仕組みはいいとして、そこで選ばれたアーティストは漏れなくアーティストバンクに登録し、ちゃんとアウトプットされるという仕組みが考えられる。アーティストバンクをつくる中間支援団体があってもいいかもしれない。アーティストバンクを専門で扱う中間支援団体が10団体の中の一ついて、1,000万円はアーティストに再分配しますよというのもありかもしれない。
- 具体的な中間支援団体のイメージが湧いてこない。アーツカウンシルみたいなものとしたら、短期ではなく、中長期の話になってしまうのかと思う。
- 例えば、中間支援団体としてエントリーし、うちではアウトリーチをやりまると言い、1,000万円を受けたとする。そして、10の小学校にアーティストを派遣するような事業をやるとしたら、1,000万円のうち、200万円は運営する人件費、コーディネート費としてもらい、残りの800万円を、10に分け、80万円を事業費とし、アーティストのフィーや材料費として払う。10のコーディネーションを200万円の人件費の中でうちの団体が担いますよというやり方になると思う。おとどけアートとやっていることは一緒なので、再分配も問題なくやれるはずだし、中間支援団体なしでアーティストがアウトリーチに行けるかと言うとそうではないので、そこで中間支援組織が機能するということ。
- 現段階での結論として、コロナ禍における中間支援団体緊急支援事業ということで、例えば、支援団体を10募集し、事業内容を提案してもらおう。創作プロセス支援事業、アーティスト奨学金事業、アウトリーチ事業みたいなものがあるって、緊急的に事業として取り組んでくれる支援団体を募集しますよというトータル事業だと思う。それは短期的にも実施するもので、アーティストの方に最終的に分配されていくというお金の流れ。アーティストバンクというものを別にやり、そこに登録されているアーティストに対して支援することという条件つきにするのか、アーティストバンク事業というものも事業テーマにするのかは別だと思う。

(2) 今後の検討方法

文化部で施策のたたき台をつくった上で、その後、施策をつくる過程をできるだけ未来会議と共有しながら、随時、フィードバックしていくこととした。